

# アタシはボク

屋代彰子

ボクが三浦半島・油壺の磯でウミウシを見かけたのは  
大学二年生の夏だった。「臨海実習」という科目の合宿で、  
海辺の生き物を観察したり、海水中のプランクトンを顕  
微鏡で観たりする。そこで記憶に残っていることといえ  
ば、迷彩色の斑紋のついた二〇センチぐらいあるポテッ  
としたウミウシと、顕微鏡の視野の中で泳ぐキラキラし  
たゴカイの幼虫だけだ。巨大なナメクジのような印象し  
かなかったウミウシだけれど、中嶋康裕『うれし、たの  
し、ウミウシ』（岩波書店、二〇一五年）によれば、ウミ  
ウシは美しい斑紋をもつことから「海の宝石」といわれ  
ているらしい。そして、ウミウシのほとんどが「雌雄同  
体」という変な性の持ち主だということも、その本で  
知った。ちなみにゴカイも雌雄同体らしい。偶然にせよ、  
ボクは雌雄同体の生き物に若いときから妙に縁があるら

しい。家の庭に棲む小指の太さほどあるミミズも雌雄同  
体らしいから、古くからの縁はこの先も続きそうだ。雌  
雄どちらか一方の性にこだわらないという性の曖昧さ・  
柔軟さ・いい加減さなどに興味をもつボクにとって、ウ  
ミウシのことを考えるのは愉快だ。

雌雄同体といえば、花を咲かせる植物を思い浮かべる。  
植物学者によれば、花を咲かせる植物の九割は雌雄同体  
らしい。たいていは花の中央に太くて長い一本の雌しべ、  
その周囲に花粉をのせた細い数本の雄しべがある。「花  
は率直に言えば生殖器である」と、身も蓋もないことを  
言っているのは、明治の植物学者・牧野富太郎だ（『植物  
知識』講談社、一九八一年）。彼は、「花という生殖器の美  
しさは動物の醜い生殖器とは雲泥の差だ」とも言ってい  
る。しかしボクの経験によれば、発情していないときの

ラットやマウスのペニスには爪楊枝の太さぐらいだし、繁殖実験のときに交尾を確認するために雌のヴァギナに綿棒を入れて精子を採取し、顕微鏡観察する「スメアテスト」をしたこともあるけれど、ペニスやヴァギナが醜いという実感はない。ちなみに、雌ラットの左右の卵巣はラズベリー状の小さな紅い器官だし、Y字形した子宮も乳白色のスマートな器官だ。雄の二個の精巣は、これも乳白色のプリンとした格好のよい二センチほどの楕円球で、初めてそれを観た女子学生たちは感激のあまり、「キレイ！」と歓声をあげたのである。動物の生殖器を「醜い」と言っている言い過ぎのように思うわけだけれど、花が雌雄同体という性に備わった装置としてこの世で最も美しい造形物であることは認めざるを得ないし、海の寶石と称されるウミウシなど足元にも及ばないと思う。

「雌雄同体」というのは、一つの個体が雄と雌の生殖器をすべて完備していて、繁殖のうえで意味のある「種の適応現象」だと生物学者たちは言っている。このような雌雄同体を正確には「同時雌雄同体」というらしい。ということとは、「ときどき」雌雄同体というものもあるのかもしれないが、詳しいことは知らない。雌雄同体の動物では、自家受精（放出した卵子に精子をかける方法）という生殖行為は非常時の手段とのことで、通常は交接相手を

探す方法をとる。そうなると相手はだれでもいいわけで、異性を探すために費やすエネルギーを必要としないし、見つからないかもしれないというリスクもない。種の繁殖・維持にとっては確率が高く都合がよいというわけだ。だから雌雄同体の生き物は意外と多く、ウミウシ、ゴカイなどの他に、ミミズ、カタツムリ、ナメクジ、深海魚などもその類だ。

よく知られているように、雌雄同体の植物は自家受粉によってタネをつくることも可能だけれど、たいていは昆虫によって他の株の雌しべまで花粉が運ばれて受粉されることが多い。花の美しさや香りは、昆虫を誘うために進化したのである。送粉（花粉を運ぶこと）のご褒美が、雌しべの付け根に分泌される甘い蜜だ。ボクは、庭の酔蝶花の雌しべの蜜を小指の先につけてなめてみたけれど、強烈に甘かった。動物は動けるから、植物のように花粉（精子）を媒介する第三者の世話にはならないし、蜜というご褒美を準備する必要もない。ウミウシの場合は二匹が横に並んで側面の交接器をくっつけ、雄役のペニスが雌役の受精嚢に精液を入れる方法だ。二つの個体が神妙に並んでいる姿を想像すると、なんだか微笑ましいよな。

ウミウシの交接の顛末は驚きの極みだ。ウミウシのペ

ニスは「デイスポーザル（使い捨て）」。しかも一日で再生するという代物で、何回でも他の個体との交接が可能だ。新しく再生される代物は、コイル状の補充ペニスが体内に格納されていて、発動準備(?)に一日かかる。そこまでしてこそその、雌雄同体というものだ。ボクが油壺で観察したウミウシもそんな芸当ができたのだろうけれど、その巧妙なからくりが発見されたのは比較的最近のことだ。植物の雌雄同体は十九世紀から知られているけれど、動物の雌雄同体と交接・交尾については、二十一世紀に入った今も未知の部分がかかなり残されているらしい。

現在知られているところでは、人類を含めた哺乳動物には雌雄同体という性の現象がない。実験動物のラットやマウスも人間と同じ哺乳動物で、個体はすべて雌雄異体だ。雄個体の配偶子(精子)と雌個体の配偶子(卵子)の融合によってのみ、受精から発生へと事が運び、雌雄の遺伝子がシャッフルされることにより、果敢に環境に適応しながら種は存続してきたわけだ。

いっぽう、繁殖上のメリットが認められている雌雄同体とはまったく違う「両性具有」という性的な現象が、人類を含めた哺乳動物で少しだけ知られている。両性の生殖器の特徴を併せもっている個体だ。有名なのは、ア

フリカのサヴァンナに棲むブチハイエナで、「雄化した雌」が見られる。でも、内部生殖器と交尾に必要な外部生殖器などが不完全な構造と機能になっているので、出産・繁殖が必ずしもうまくいかないらしい。人間にみられる両性具有も、性染色体や受精卵の発生上のエラーがその原因になっていることが多いし、生殖機能は発揮できない。

一般的に、生き物の「性」は、カラダの内部や外部の生殖器(性器)の特徴に対して雄とか雌とかの区別がなされている。これを「生物学的性」といつている。それに対して、哺乳動物の脳には、「性自認」、「性指向」などに性に関わる神経細胞の存在が知られていて、その働きが「性行動」に関係していることもわかってきた。つまり、ヒトの「性行動」は、「生物学的性」、「性自認」、「性指向」の三つの組み合わせの結果だ。生物学的性が必ずしも性自認や性指向と結びつかないことも人間ではよく知られていて、複雑な様相を示す。人間の性自認や性指向は、「脳の性(「ココロの性）」と言い換えてもいいだろう。つまり、人間の性は他の動物と異なっていて、「脳の性」に支配されているように思えるし、本来、生殖のための「性」だったはずのものが、その目的を見失い、「脳の性」が彷徨っているようでもあるし、なんだか人間の脳は、

「性」を持て余し気味にもみえる。

人間に見られる複雑な性の現象が、人々の関心の的になっていることは否定できない。空想とはいえ、その世界を描いているのが小説『親指Pの修業時代』（松浦理英子、河出書房新社、一九九三年）だ。それは本物の両性具有とはいえないけれど、生殖機能をもたない後付け外部生殖器に翻弄される人間たちの話だ。

主人公の一実 は平凡で真面目な女子大学生だけれど、自死した友人の夢を見たあと目覚めてみると、右足の親指が立派なペニス（P）になっていた。それを知った恋人や友人たちは当惑するが、Pをいたぶったり傷つけたりしてもあそぶ者もいる。友だちの映子は、一実に対してPを仲立ちにした奇妙な同性愛関係を迫る。一実は同性と肌を触れ合うことによる性の快楽を初めて知る。しかし、一実のココロの動きに敏感に反応するPは映子に強い喜びを与えることができるものの、Pの行為によって一実が喜びを感じることはない。一実の感覚は、あくまでもされる側としての女性の性感なのだ。Pの存在は口から口へと伝わり、一実は「フラワーショー」という「性にまつわる器官に普通の人と大きく違った特徴のある特別なメンバーの集まり」による闇の見世物一座に誘われ、お金稼ぎのために少人数の顧客の前でPによ

る性戯を演じることになる。そんな「親指Pの修業」がしばらく続くが、そのうち見世物一座は解散し、一実は真実の異性愛に目覚め、信頼する男性の春志と将来を誓うことになる。

完全な女性のカラダに突如として男性のシンボルが出現する。たまさか足の指に現れた。これは女性の中に元々ある「男になりたい願望」なのだろうか。女だけれど、もし男になったらどんな気分だろうか。しかし結論からいえば、男性のシンボルは一実のコントロールの外にあり、なかば自律的存在。一実にとって、親指Pの存在は不可解なままだ。すなわち、一実の性自認は女性であり、異性に対する強い性指向があり、一実の脳は、親指Pを自分自身の一部として認めることができない。たとえ身体的性／性器を変えてみたところで、「脳の性」による支配から自由になることはできない。『親指Pの修業時代』は、そのことを暗示していると思う。

幼い頃、ボクは自分のことをアタシと言わないで、「ボク」と言っていた時期があった。それが四歳の頃だったと思うのは、ひとつ年上の従兄が学校に上がる前だったからだ。いつも年下の従弟と三人で遊んでいた頃のこと。通っていた幼稚園の先生から「ボク」のことを聞いた母

は、「ボクじゃなくてワタシよ」と言い、そんなこともわからないの、と戸惑った顔をした。そのときのことをよく憶えているのは、めずらしく母親に叱られたと思っただからだろう。

アタシは自分自身のことをボクと言っていたけれど、そのことに特別なこだわりがあつたとは思えない。三歳九カ月ときの七五三写真を見ると、着物に被布を重ね、コテでカールさせた髪の上には大きなリボン。白黒写真の口元はくっきりと黒っぽく写っているから、紅い口紅をベツタリ塗られていたに違いない。自分がオトコかオナナかを自覚する前に、つまり、脳の性が未熟なときに親や周囲の大人たちから女の子として扱われていたのである。そのあたりのことに詳しい友人によれば、子どもというものは、三歳半頃になると男の子同士、女の子同士で遊ぶようになるという。その時分に性別に対する漠然とした意識が芽生えてくるらしい。同居していた従兄弟たちとアタシとは、オシッコのところが違うということを知り、そのことに興味を感じた頃でもある。たぶん四歳のアタシは、自分がオナナだと漠然と感じながらも「ボク」と言っていたのだろう。男女のカラダの違いには気づいたとしても、社会的・文化的な男女の違いには考えが及ばなかった。たぶんそれだけのことに過ぎ

ない。英語なら何も迷うことはない問題だ。アタシもボクも、「I」でいいのだから。

ボクは大人になって一人の男性と恋に落ちて結婚した。二人の子を産んで、母乳もたくさん与えたので、ボクはたぶん真正銘の女性だと思う。だから日本文化の慣習に従って、普段は自分のことをボクとは言わないようにしているけれど、いま使ってみたら、やったぜ、実に爽快だ。「ときどき」雌雄同体になるのも悪くはない。そんなふうには、雌雄同体や両性具有というややこしい性の現象には強い興味を抱いているけれど、ボクがひとまず女性という性を全うできたことは、ウミウシには悪いけれど、生き物として幸運なことなのかもしれない。そして、自分の性についてあれこれ考えを巡らすことができるのは、ボクが人間だからこそ思っている。

生き物の世界に「性」が出現したのは、数億年前のこと。しかも、その性は、二つであり、三つや四つではない。なぜ二つなのか、答えはどこにもない。どういうわけか、異なった配偶子をつくる個体が二種類いる。運動性に富む小さな配偶子（精子）をつくる雄と、運動性をもたない巨大な配偶子（卵子）をつくる雌だ。人間の卵子は一ミリの五分の一もあり、砂粒よりも大きく、肉眼で

見える。それに対して、精子一個は肉眼では全く判別できない。この二種類の配偶子は受精という細胞融合によって一つになり、個体形成への長い旅を始める。個体になった雌雄異体の生き物には、配偶子形成だけでなく、主に性ホルモンの働きによって、見てわかるようなカラダの雌雄差が現れる。人間の場合もたいてい、はつきりわかる。そんな生き物世界の雌雄差は、配偶子を求める繁殖行動のために都合がよいと考えられている。雌雄異体、雌雄同体、両性具有など、生き物の種が存続するための「性の戦略」は巧みであり、どこか大らかでもある。それなのに、生き物の一員としての人間の性を考えると、息苦しくうつとうしい。日本の社会的・文化的側面の「性」を考えると、いつそうその思いが強くなる。現代にも存在する根強い性別・性差意識に対して、違和感を抱くからだ。

日本文化に内在し強固な文化的基盤ともいえる性別意識を解消することは、一筋縄ではいきそうにない。たとえ法律や制度がジェンダーフリー、ジェンダーギャップの解消に舵を切っても、日本人の性別・性差意識というものとは簡単に変わらないのではないかと思う。なぜなら、日常会話の人称代名詞には、「男として」、「女として」という性別・性差を前提とした意味がそもそも込められて

いるからだ。このことが、絶対かつ当たり前のこととして、幼いときから叩き込まれている。テレビに出演する女性装の男性が、「ボク」、「オレ」などと言っているのを聞いたことはなく、みんな「アタシ」である。異性になり、まずには、まずは一人称単数からである。

全国的に使用されている標準語で、男女共通の一人称単数の代名詞は、「ワタシ」、「ワタクシ」だけで、男性では他に、「ボク・オレ・シヨウセイ(小生)・ソレガシ(某)等々あるが、女性では「アタシ」しかない。公的な場面での人称代名詞は「ワタシ(たち)」や「アナタ(たち)」などが使われるが、男性では、クダケタ状況で、相手との関係を人称代名詞で表現することが多い。語源からみると、いずれも自分自身を「謙遜した」言葉のようだ(白川静『字統』平凡社、一九八四年)。女性には、このような選択肢はない。一人称単数が男女別でなければ——、さらに、二人称も「アナタ」だけなら——、日本の社会はずいぶん雰囲気が変わるだろうと思っている。つまり、強い性別・性差意識の根底には日本語の特徴がある。「意味」が同じであるにもかかわらず、「語感」の異なる語句が多い。それが、日本語の特徴だろう。とくに、豊富な人称代名詞の語感の違いの中には反感を覚えるものもある。すでにそのところで、話し言葉の語句そのもの

のに「感情」、「気分」が強く込められてしまうのである。「オマエ」、「テメエ」、「ヤツ」、「アイツ」などが無くなれば、職場、家庭、友人、恋人などの人間関係に変化が生じるだろう。人権問題にも影響しそうだ。七十年も日本語を使ってきたので、そのくらいのは感じるし、考える。何かと問題にされる敬称や敬語の使い方などよりも、むしろ人称代名詞の方に気遣いや工夫が求められてよいのではないだろうか。

日本語文化に見られる性別・性差は人称代名詞に限らない。女性に対する「有標」言葉、つまり、それに対応した男性言葉がないもの、たとえば、「乙女」、「女流」などがある。「なでしこジャパン」は、昭和への郷愁である「大和撫子」から名付けられた。いうならば、男性目線で女性につけられた別称だ。性別・性差は生き物である人間に備わった基本的な「特質」だけれど、日本の社会や文化の中では、ことさらそれらが強調・修飾されてきたことは否めない。幾重にも絡みついている性の縛りをゆっくり穏やかにときほぐし、性の息苦しさから解放されるべきときが来ているのではないだろうか、私は思う。

(了)